近世後期における羽州湯沢～江戸間の旅のルートと歩行距離について ～天保11年『諸國道中記』の分析から～

谷釜尋徳

Travel routes between Ushu Yuzawa and Edo and walking distances in the later term of Edo period～Analysis of the *Shokoku Dochuki* (1840)～

TANIGAMA Hironori

Summary

This research considers trends in distances walked by travelers during the latter term of Edo period by analyzing the *Shokoku Dochuki*, a travel diary dating from 1840. The conclusions reached therein are as follows.

In considering the travel routes in the *Shokoku Dochuki*, the main route between Yuzawa and Edo passed through Ushu-kaido, Dewa-kaido, Matsumae-do, Sendai-do, Oushu-kaido, and Nikko-kaido.

The research shows that posting stations were positioned on average 7.7 km apart on this route.

Next, calculating the total walking distance between Yuzawa to Edo yields 536.8 km, with travelers walking an average of 38.3 km per day.

It was found that people making this trip generally maintained a steady pace from departure to destination and were not greatly affected by the number of days they had been on the road or differences in the areas through which they were walking.

1．はじめに

天保11（1840）年6月1日，とある旅人が羽州湯沢町（現・秋田県湯沢市）近郊の与作村から江戸に向かって旅立った。距離にして約530kmを14日間で歩き通す長距離徒歩旅行の幕開けである。この旅人は，湯沢～江戸間の道中での一部始終を刻銘に記録し，その旅日記[1]の表題を『諸國道中記』[2]と命名した。表紙には「天保十一歳 諸國道中記 庚子六月吉日」とあるが（図1参照），旅人の名前や人物像は不明である。

この旅日記には，湯沢出立から江戸到着までの道中に関して，通過した地名や宿泊地等の情報が詳しく記載されている。表紙は縦長であるが，中身は横長仕様の縦書きで，計15丁から成る和綴じ製本の史料である（図1，2）。虫食いの形跡や

東洋大学スポーツ健康科学研究室　〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 28-20, Hakusan 5, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

図１　『諸國道中記』の表紙
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より転載。

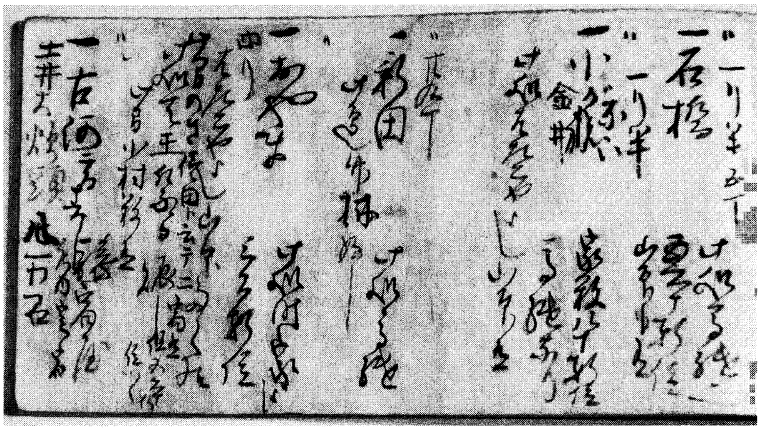

図２　『諸國道中記』日光街道の石橋～古河間通行時の記述内容
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より転載。

汚損箇所は特段みられず，保存状態は良好であるといってよい。文中には修正ないし加筆した部分が数ヵ所確認されることから，旅の終了後に改めて清書した可能性もある[3]。

旅の時期は旧暦の６月であったが，この頃は新暦では７月上旬～中旬の暑い季節に当たり，連日の長距離歩行に臨むには適した時節柄ではなかった。また，近世後期に庶民層の間で流行した娯楽としての旅は，道中の異文化（名所旧跡・名物等々）に触れて見聞を広めることを重視していたが[4]，この旅日記には道中の観光地を訪問したり，主要な宿場に逗留して遊んだ記述は見られない。したがって，本稿で取り上げる『諸國道中記』の旅とは，娯楽目的というよりは，むしろ商用等の必要に迫られた旅であった可能性が高い。

近世後期における庶民の旅は，「徒歩」が主たる移動手段であった。今日と比べて移動手段が未発達な時代にあって，庶民が旅をするためには毎日のように長距離を歩き通し，無事に在地へ帰着するだけの「健脚」の持ち主でなければならなかったのである。ゆえに，近世に旅をした庶民は，現代人が想像する以上に「歩く」ということを重要視していたに違いない。それでは，長距離を徒歩で移動した彼ら旅人は，どのくらいのペース配分をもって毎日の道中を歩いていたのであろうか。

これまで近世後期の旅人の歩行距離は，概ね１日あたり10里（約39km）程度であったと指摘されることが多く，これが通説的な観念として捉えられてきた。しかし，この歩行距離の値は，当時代における歴史資料の詳細な分析を通して導き出されたものとは言い難く，再度検討する余地が認められる。

こうした観点から，拙稿では，近世後期の江戸及び江戸近郊地の庶民男性による伊勢参宮の旅日記14篇を用いて，彼らが１日あたり約34.4kmを歩く傾向にあったことを明らかにした[5]。また，同時代の庶民女性が記した旅日記９篇の分析を通して，彼女らの道中の歩行距離が１日平均で約30.4kmであったことも指摘した[6]。しかし，上記の諸

研究において手掛かりとした旅日記が少数であったことに鑑み，さらに，近世後期の関東地方の庶民による伊勢参宮の旅日記を90篇あまり蒐集し，平均的な歩行距離の分析を試みた[7]。その結果，江戸～伊勢間の往路ルートにおける平均歩行距離は１日あたり約33.1kmであったことがわかり，客観的な見地からの数値を導き出すことができた。

そのほか，上記の諸研究が在地～目的地間の往路ルートのみに着目したものであったことから，旅の往復路の全行程を対象とした歩行距離の分析も実施した[8]。加えて，幕末期に江戸から九州へ旅をした男性の旅日記の原史料を翻刻および分析して，その平均歩行距離が35km程度であったことを明らかにした[9]。

このように，拙稿がこれまで研究対象としてきたのは，関東地方一円から旅立った人々の歩行距離に限られており，それ以外の地域に住まう庶民が旅の道中でどの程度の距離を歩いたのかという史実は，全く解明されてこなかったと言わねばならない。そこで本稿では，羽州湯沢町与作村から江戸までの旅日記『諸國道中記』の分析を通して，東北地方からの旅人による道中の歩行距離の一事例を明らかにすることにしたい。

２．湯沢～江戸間における旅のルートの検討

ここでは，『諸國道中記』の旅における歩行距離を証かすための前提として，湯沢～江戸間の足取りを明確にしておきたい。しかしながら，当該史料は文字のみが記載された旅日記で，ルートにまつわる図版等の描写は皆無である。そこで，記述された文字情報からルートの復元を試みたものが図３である[10]。

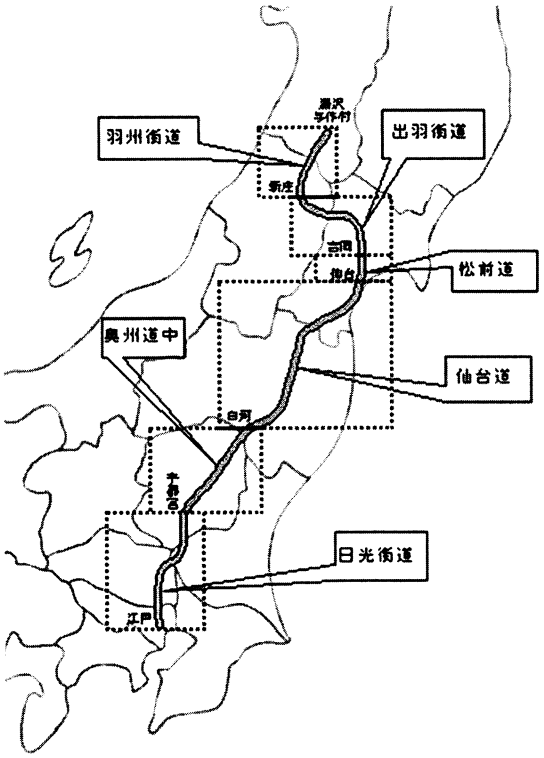

図３　『諸國道中記』の湯沢～江戸間におけるルート
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

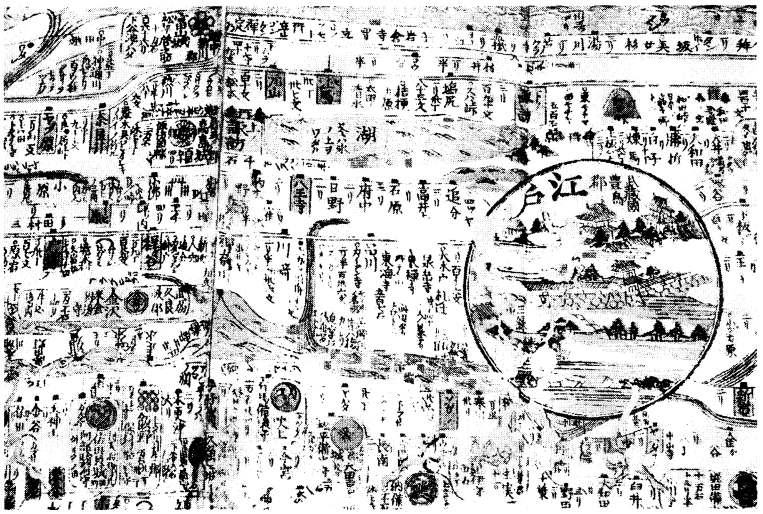

図4　『改正増補大日本國順路明細記大成』の江戸付近の記述内容（部分）
山崎久作：『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛，1846（筆者蔵）より転載。

ルートの詳細な復元にあたっては，『改正増補大日本國順路明細記大成』[11]（図4）を主な拠り所とした。当該史料は，日本全国の街道筋が地図上に多色刷りで網羅されており，各街道における宿場間の距離の情報を漏れなく知ることができる。また，『諸國道中記』の旅が慣行された時期と近い弘化3（1846）年に発行されているため，この旅日記の著者が歩いた道中の模様が地図上にほぼそのまま反映されていると考える。

図3によれば，湯沢～江戸間のルートは，主に羽州街道，出羽街道，松前道，仙台道，奥州道中，日光街道を通行するものであったことがわかる。

以下，『諸國道中記』の旅のルートを辿ってみると，6月1日に在地の湯沢与作村を出立した旅人は，羽州街道経由で初日は院内宿に宿を取り，2日目には新庄に至る。新庄宿を出ると，付近の追分から出羽街道に入り当日は鳴子まで足を延ばし，翌日は吉岡に宿泊した。6月5日には吉岡宿を出て松前道を歩き，その日のうちに東北の大都市仙台に到着する。

6月6日～9日にかけては仙台道に入って白石，八丁目，郡山，白河の順に宿を取った。その翌日は奥州道中を歩き，翌日には宇都宮に到達，さらには日光街道を経由して3日間をかけて目的地の江戸に着き，14日間の長旅に終止符が打たれた。

3．湯沢～江戸間における宿場の配置の検討

以上の検討を通して，『諸國道中記』の旅人が歩いた湯沢～江戸間のルートが明らかとなったが，当該ルート上において宿場はどのように配置されていたのであろうか。旅人にしてみれば，休息ないし宿泊が可能な宿場の配置やその間隔（距離）は，道中における重要な歩行の目安となり，毎日の歩行距離にも多大な影響を及ぼしたと考えられる。そこで以下では，『諸國道中記』の旅における湯沢～江戸間の宿場の配置を明確にしておきたい。

なお，宿場間の距離の検討については先ほどと同じく『改正増補大日本國順路明細記大成』の記載内容に基づいている。ここでは，『諸國道中

記』の旅のルートを便宜的に街道ごとに区切り，湯沢～新庄間（羽州街道），新庄～吉岡間（出羽街道），吉岡～仙台間（松前道），仙台～白河間（仙台道），白河～宇都宮間（奥州道中），宇都宮～江戸間（日光街道）に分かち各々の傾向をみていきたい。

3－1　湯沢～新庄間の宿場の配置（羽州街道）

湯沢（与作村）～新庄間における羽州街道の宿場間の距離を地図上に示した図5をみると，60km程度の街道筋に5つの宿場が配置されていたことがわかる。当該区間における宿場間の距離の平均値を求めてみると，約12.6kmに1つの間隔で宿場が設けられていたことになる。

3－2　新庄～吉岡間の宿場の配置（出羽街道）

次いで，新庄～吉岡間の出羽街道について作成した図6をみると，100km程度の道のりに14の宿場が設置されている。平均的な宿場間の距離間隔は，約7.2kmであった。

3－3　吉岡～仙台間の宿場の配置（松前道）

吉岡～仙台間の松前道はわずか20km程度であったが，この間の宿場は約7.5kmに1つの距離間隔で配置されていた（図7）。

3－4　仙台～白河間の宿場の配置（仙台道）

仙台～白河間（仙台道）についてみると，約160kmの道中に40を超える数の宿場が配置されている（図8）。この区間は，宿場の間隔が最も短く，その平均値は約3.9kmであった。

3－5　白河～宇都宮間の宿場の配置（奥州道中）

白河～宇都宮間の奥州道中においては，約85kmの間に10の宿場が配置されていた。宿場の間隔は平均約8.4kmであったが，この街道はここで取り上げたものの中で最も広い距離間隔で宿場が設けられていた。

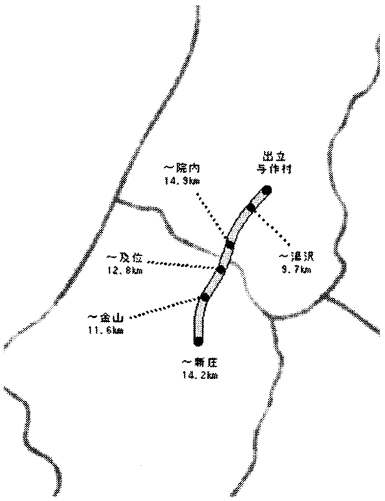

図5　湯沢～新庄間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

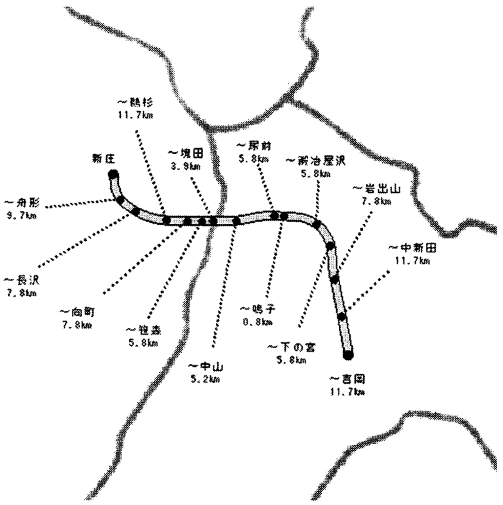

図6　新庄～吉岡間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

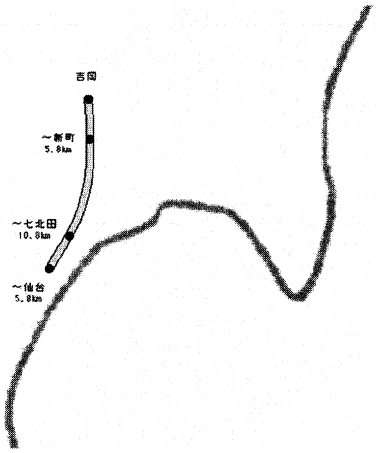

図７　吉岡～仙台間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

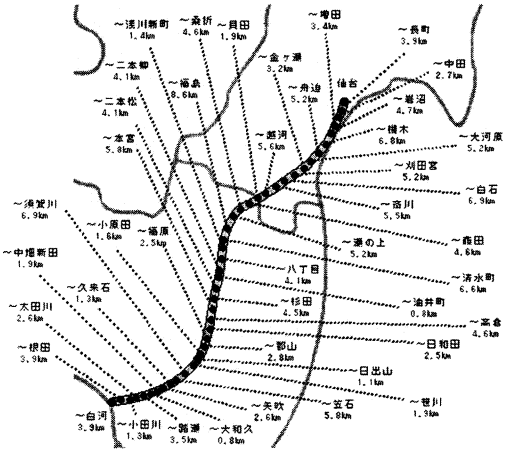

図８　仙台～白河間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

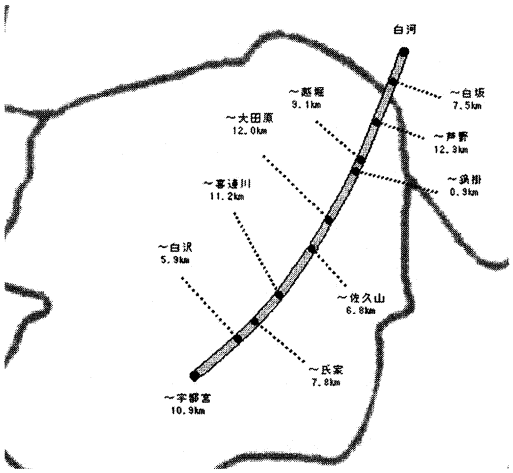

図９　白河～宇都宮間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

３－６　宇都宮～江戸間の宿場の配置（日光街道）

最後に，宇都宮～江戸間（日光道中）における宿場間の距離を示した図10をみると，110km程度の街道筋に17の宿場が配置されていたことがわかる。その宿場の間隔を検討すると，平均値は約6.5kmであった。

なお，湯沢～江戸間の全てのルートで平均すると，約7.7kmに一つの間隔で宿場が設置されていたことになる。

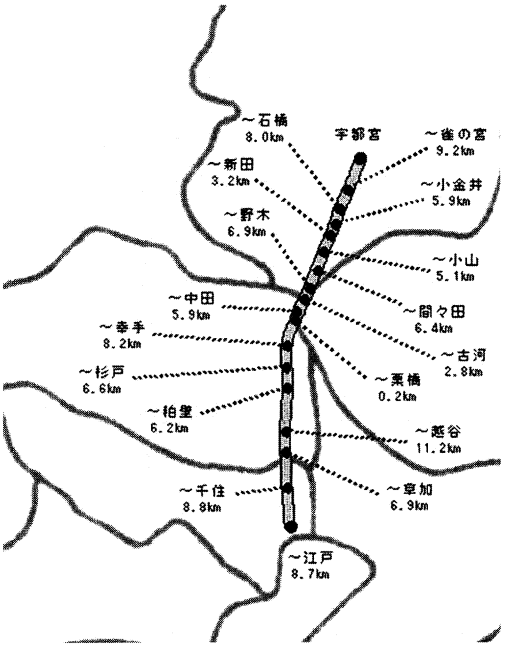

図10　宇都宮～江戸間の宿場の配置
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

４．湯沢～江戸間における歩行距離の傾向

これまでの検討において，『諸國道中記』の旅のルートや当該ルート上の宿場の配置が明るみに出されたが，旅日記の著者はこの道中をどのようなペース配分をもって歩いたのであろうか。このことを知るべく，先に明確にしておいた宿場間の

表１　『諸國道中記』の湯沢～江戸間の歩行距離

日数	日付	ルート	区間	歩行距離
1	6月1日	羽州街道	与作村～院内町	24.6km
2	6月2日		院内町～新庄	38.6km
3	6月3日	出羽街道	新庄～鳴子	58.5km
4	6月4日		鳴子～吉岡	42.8km
5	6月5日	松前道	吉岡～仙台	22.4km
6	6月6日	仙台道	仙台～白石	47.2km
7	6月7日		白石～八丁目	48.1km
8	6月8日		八丁目～郡山	31.7km
9	6月9日		郡山～白河	39.1km
10	6月10日	奥州道中	白河～佐久山	37.8km
11	6月11日		佐久山～宇都宮	35.8km
12	6月12日	日光街道	宇都宮～古河	47.5km
13	6月13日		古河～草加	45.2km
14	6月14日		草加～江戸	17.5km

『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

距離を基に，毎日の出立した宿場から宿泊した宿場までの距離の総和をもって歩行距離を算出することにしたい。

４－１　湯沢～江戸間における歩行距離

『諸國道中記』における14日間の旅について，日ごとに歩いた区間とその歩行距離を整理したものが表１である。また，図11には，表１の歩行距離にまつわる情報を地図上に転記した。

図表によって歩行距離を合計してみると，湯沢～江戸間の総歩行距離は536.8kmとなる。これを14日間の所要日数で割ると，この旅人は１日平均で約38.3kmを歩き続けたことがわかる。冒頭でも述べたように，近世後期の関東地方の庶民による伊勢参宮の旅日記を分析した結果，江戸～伊勢間の往路ルートの１日平均歩行距離は約33.1kmであった[12]。『諸國道中記』の平均歩行距離はこれと比較して５km以上も長く，この旅人が健脚の持ち主であったと見ることができよう。また，14日間の道中のうちで，最長の歩行距離は３日目の新

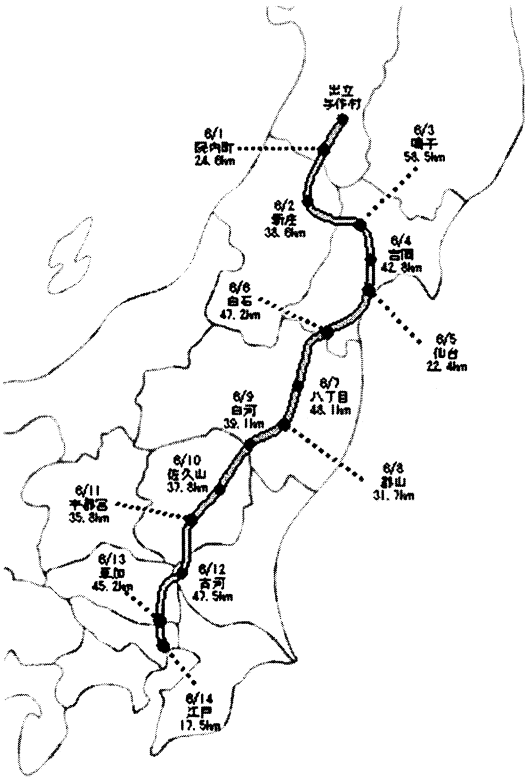

図11　『諸國道中記』の湯沢～江戸間の歩行距離
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

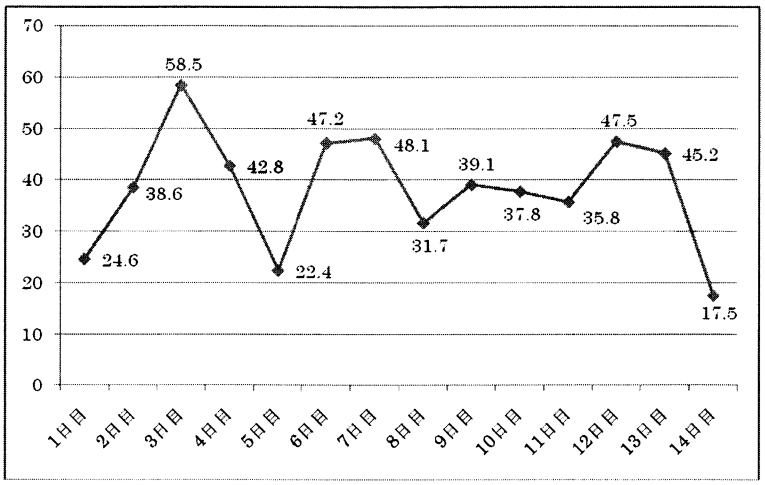

図12 『諸國道中記』における時間と歩行距離との関係
『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

庄～鳴子間の58.5km，最短は最終日の草加～江戸間の17.5kmであった。

次いで，『諸國道中記』における歩行距離の割り合いを知るべく，14日間の歩行距離を10km単位で区切ってカウントしていくと，10km台の歩行距離を示しているのが1日，以下20km台が2日，30km台が5日，40km台が5日，50km台が1日であった。

4－2 時間と空間からみた歩行距離の傾向

まずは，道中における時間的経過が歩行距離に及ぼした影響を探ってみよう。日数を重ねるごとに疲労が蓄積していくことを思えば，旅の序盤と終盤とでは歩行可能な距離にも変動が生じることが想定されるためである。

上記の観点から，『諸國道中記』の全行程における時間的経過と歩行距離の推移が判明するグラフを作成した（図12）。グラフの縦軸は歩行距離（単位：km）を，横軸は所要日数を示している。このグラフによると，14日間の道中における毎日の歩行距離は一定ではないが，旅の序盤から終盤にかけてグラフが反比例の傾向を示すことはなく，終盤の12～13日目にも平均値（約38.3km）をゆうに超える距離を歩いていることが確かめられる。したがって，本稿が取り上げた『諸國道中記』の旅においては，時間的経過が歩行距離に多大な影響を及ぼす傾向は見られなかったといえよう。

次に，空間を基準として歩行距離の傾向をみよう。先に示したエリア区分，すなわち在地～新庄間，新庄～吉岡間，吉岡～仙台間，仙台～白河間，白河～宇都宮間，宇都宮～江戸を単位として各々の傾向を対比したものが表2である。

表2を通して1日平均の歩行距離を見比べてみると，該当日数が1日のみの松前道（吉岡～仙台間）を除くと，その他の区間では平均値に近いかそれ以上の距離を歩いている傾向が確かめられる。したがって，『諸國道中記』の旅は，概ね旅の全行程において一定のペースを保って歩き続けるものであったといえよう。

5．おわりに

本稿は，天保11（1840）年の『諸國道中記』の分析を通して，近世後期の東北地方における旅人の歩行距離の傾向を見ようとするものであった。検討の結果は，以下のように整理することができ

表２　『諸國道中記』における空間と歩行距離との関係

エリア区分		羽州街道（与作村～新庄）	出羽街道（新庄～吉岡）	松前道（吉岡～仙台）	仙台道（仙台～白河）	奥州道中（白河～宇都宮）	日光街道（宇都宮～江戸）
該当日数		２日	２日	１日	４日	２日	３日
総歩行距離		63.2km	101.3km	22.4km	166.1km	73.6km	110.2km
平均歩行距離		31.6km	50.7km	22.4km	41.5km	36.8km	36.7km
宿場の平均距離間隔		16.2km	7.2km	7.5km	3.9km	8.4km	6.5km
歩行距離の割合	10km台						１日
	20km台	１日		１日			
	30km台	１日			２日	２日	
	40km台		１日		２日		２日
	50km台		１日				

『諸國道中記』1840（筆者所蔵）より作成。

る。

『諸國道中記』の旅のルートを検討したところ，湯沢～江戸間のルートは主に羽州街道，出羽街道，松前道，仙台道，奥州道中，日光街道を通行するものであった。

当該ルート上において，休息や宿泊が可能な施設としての宿場がどのように配置されていたのかを考察した。その結果，多少のばらつきは見られたものの，平均的にみれば約7.7kmの距離間隔をもって宿場が配置されていたことが判明した。

次いで，この旅における歩行距離を算出してみると，湯沢～江戸間の総歩行距離は536.8kmであった。これを14日間の所要日数で割ると，この旅人は１日平均で約38.3kmを歩いており，それは当時の一般的な傾向よりも若干高い数値であった。また，旅の道中を10km単位で区切ってカウントしていくと，大半は30km台ないし40km台に集中していた傾向が確かめられた。

この旅では，時間（日数）の経過や空間（エリア）の違いが歩行距離に大きな影響を及ぼすことはなく，在地出立から目的地到達まで，概ね一定のペースを保って歩いていたことがわかった。

＜注記及び引用・参考文献＞

1）ここでいう旅日記とは，旅程順に日付，天候，宿泊地，旅籠名，旅籠代，昼食代，間食代，訪問地とその若干のコメント，賽銭，渡船代，その他購入した品々の代金などが列記されたものであり，金銭出納帳ないし日誌的な性格の史料である。全ての旅日記にこれらの項目が漏れなく記されているわけではないが，そのいずれかについて記録されているといってよい。このように，旅日記は「個人的な旅の記録というよりも，家族や地域社会に伝えるべき情報を網羅した報告書的な役割を担っていた」（田中智彦：「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」『交通史研究』49号，2002，p.20）ものであり，旅人が見聞した異文化世界の情報を在地の人々へ提供するためのメディアともなっていた。

2）『諸國道中記』1840，筆者所蔵

3）旅日記を後で清書することについては，文化７（1810）年刊行の旅行ガイドブック『旅行用心集』にも関連の記述がある。すなわち「追而（おって）帰国の上取立浄書（せいしょ）すべし」（八隅蘆庵：『旅行用心集』須原屋茂兵衛伊八，1810，38丁，筆者所蔵）と説かれていることから推して，これは当時一般的に採られていた方法かもしれない。

4）谷釜尋徳：「近世後期の伊勢参宮の旅にみる楽しみ方の類型」『日本体育大学紀要』36巻２号，2007.3，pp.183－196

5）谷釜尋徳：「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」

『スポーツ史研究』20号，2007.3，pp.1－22
6）谷釜尋徳：「近世後期における庶民女性による旅の歩行距離について」『体育史研究』27号，2010.3，pp.33－45
7）谷釜尋徳：「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』8号，2011.3，pp.33－54
8）谷釜尋徳：「近世庶民の伊勢参宮の旅にみる歩行距離の実際」『東洋法学』56巻1号，2012.7，pp.59－75
9）谷釜尋徳：「近世後期における江戸～唐津間の旅のルートと歩行距離について」『運動とスポーツの科学』18巻1号，2012.12，pp.17－27
10）以下，本稿においてルートを地図上に復元するにあたっては，近世の旅を現代の視点からイメージしやすくすべく，地図上の境界線は現行の広域行政区画とした。
11）山崎久作：『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛，1846，筆者所蔵
12）谷釜尋徳：「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』8号，2011.3，pp.33－54

[付記]
本研究は，科学研究費補助金・基盤研究（C）の助成を受けて行われた（課題番号：25350784）。